

■「世界的権威のある土木学会の見解を重視せよ。」

町田輝次

10月29日の読売新聞を見ると、近畿地方整備局が世界的権威のある「土木学会」へ耐越水堤防について土木技術的な見解を求め、現在での土木技術としては困難との判断が出されたとのことが報じられていました。

私は、一淀川流域住民であると同時に技術士（河川・砂防に係る土木技術者の国家資格）であることから、関心を持って本文を拝見しましたところ、よく理解出来る内容でした。

私なりに、現存する堤防に今以上の大きな負担を強いることは構造上きわめて危険であるとの認識を常日頃から持っていましたので、土木学会の見解を十分納得した次第です。

以上のことから、水害及び地震国である我が国において末永い土木構造的の「安全・安心・信頼」は大切な生活環境の柱であることから、これらに優れたダムに期待すべきことは感情論は別として、技術論としては当然と考えます。

近畿地方整備局においては、今回の土木学会見解を基に、治水対策を切に願っている「直接の当事者」の要求を最優先に取り上げ、一刻も早い河川整備を推進されることを強く望むものであり、不透明な今、機を逸すると河川整備をしたくとも国家予算がひっ迫して整備できない事態を恐れるところでもあります。

最後に、議論ばかりでは生命・財産は守れないということです。

やはり、必要な手当てを速やかに形にしてこそ「安全・安心」な暮らしが送れるというごく当たり前のことを、総ての人が再認識すべき時期であり、自らが水害を受けたあるいは受けるであろう当事者の立場に立って物事を考えていただければと切に願うものです。

そうすれば、対立から対話になって、平和な淀川水系流域圏が訪れるような気がしてなりません。